近代東アジアの筆談研究に不可欠な貴重資料
――『大河内文書』刊行の文化史的意義

劉 雨珍

二〇一四年末、「東アジア筆談文献資料の整理と研究」が中国の国家社会科学基金重大プロジェクト（研究代表者：現浙江大学・王勇教授）に採択された。それを契機に、筆談研究は中国で脚光を浴びるようになり、多くの成果を生み出したが、文献整理において最も注目すべき成果は、王宝平教授の主編による『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』全八冊（浙江古籍出版社、二〇一六年）である。題名が示すとおり、本書は大河内輝声と明治前期来日した中国人、朝鮮修信使との筆談資料を収録した『大河内文書』の全記録である。これまで研究者の間で広く知られていたが、このたび編者は大東文化大学図書館、早稲田大学図書館、高崎市頼政神社に所蔵されている筆談原本（一部は抄本）を、日本の専門業者に委託してカラー写真製版に仕上げた。全八冊で三七八五頁にも及ぶ本書は、筆談プロジェクトの中間成果としてのみならず、中国の国家出版基金の助成をも受けた巨大な労作であり、学界に資するところ極めて大きい。

大河内輝声（一八四八～一八八二）は元高崎藩主であり、姓は源、松平とも称し、桂閣、墨水逸人などの号を持つ。万延元（一八六〇）年、父輝聴の逝去により一三歳で家督を相続し、慶応三（一八六七）年陸軍奉行並に命じられ、フランス人士官のシャノアンから兵術を学んだ。廃藩置県後は華族として、浅草今戸町にある自邸桂林荘に住み、専ら文雅の世界に遊んだ。明治一一（一八七八）年二月二五日、はじめて芝増上寺月界院にある清国公使館で公使の何如璋、副使の張斯桂らと筆談を交わしてから、頻繁に公使館を訪ね、中国人との筆談を繰り広げた。二八日に創作した七言律詩の頸聯「不假辯官

王宝平主編
日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書全8冊
（東亜筆談文献資料叢刊）
18.5× 26.0cm　3785頁
浙江古籍出版社
［本体 144,000円 + 税］

三寸舌、只揮名士一枝毫」（本書第三冊一三六二頁）で見られるように、大河内は通訳（辯官）よりも、筆談での交流をこよなく好んだ。公使館で子供や雑用係を含めて知らない顔を見ると、すぐに筆談で交流を求めた。そして、その場の筆談状況を理解しやすくするために、大河内は帰宅後、赤で筆談者の名前、場所、場面などについて丁寧に説明し、番号をつけて大事に保存していた。その目的はこれらの筆談記録を自家の宝物として子孫に残すためであり、筆談の中でも繰り返しそれを強調していた。

ところで、この厖大な筆談資料を発見して、最初に学界に紹介したのは、早稲田大学教授の実藤恵秀氏であった。一九六四年、実藤氏はその一部を編訳して『大河内文書――明治日中文化人の交遊』（平凡社東洋文庫）として刊行してから、筆談資料は広く世に知られるようになった。その後、鄭子瑜氏との共編により、中国語版『黄遵憲与日本友人筆談遺稿』（早稲田大学東洋文学研究会、一九六八年）が刊行され、二〇〇五年『黄遵憲全集』が中華書局より刊行された際、鄭氏による最新改訂版が「与日本友人大河内輝声等筆談」と題して収録された。

大河内自身が朝鮮修信使に、「僕蔵清人筆話帖、已百有餘卷」（本書第八冊三六四七頁）と述べたように、筆談資料はもともと百巻を超えたが、現存は七八巻で七六冊のみ。その詳細を見ると、大東文化大学図書館は五一巻五〇冊、早稲田大学図書館は一六巻一六冊、頼政神社は六巻六冊、実藤抄本は五巻四冊。以下、これらの筆談資料を簡単に整理してみよう。

一、「羅源帖」：一八七五（明治八、乙亥）年九月三日から翌年八月二二日にかけて、大河内輝声と来日中の画家羅雪谷との筆談録であり、現存は一六巻。羅雪谷は清末の画家で、広東の人。名は清、字は壺氷、号は羅浮山樵、雪谷道人など。一八七一年に来日し、一八七六年に帰国した。

二、「丁丑筆話」：一八七七（明治一〇、丁丑）年七月七日から一二月三一日までの筆談録であり、現存は七巻。筆談者は大河内輝声と王治本、王藩清、王仁乾ら来日中の民間文人である。

三、「戊寅筆話」：一八七八（明治一一、戊寅）年一月二日から一二月一五日までの筆談録。現存は二五巻で、第二四巻を欠く。第六巻と第一五巻の筆談原本はすでに散逸し、実藤抄本が残っている。筆談者として、日本側は大河内輝声のほかに、石川鴻斎、亀谷省軒、増田岳陽、青山延寿、加藤桜老、森春濤らの漢学者が中心であった。中国側は何如璋、張斯桂、黄遵憲、沈文熒ら公使館員のほかに、前出の王治本、王藩清、王仁乾ら民間文人も加わっている。

四、「己卯筆話」：一八七九（明治一二、己卯）年一二月一二

日から一二月三一日までの筆談録。もとは一六巻あるが、現存は第一五巻の原本と第一六巻の実藤抄本二巻のみ。筆談者は大河内輝声、石川鴻斎、亀谷省軒らと黄遵憲、沈文熒ら公使館員、それに前出の王治本、王藩清、王仁乾ら民間文人。

五、「庚辰筆話」：一八八〇（明治一三、庚辰）年一月一日から五月二六日までの筆談記録。現存は第一巻の実藤抄本と、第二巻から第九巻までの筆談原本である。筆談者は大河内輝声、石川鴻斎、亀谷省軒らと黄遵憲、沈文熒ら公使館員、それに前出の王治本、王藩清、王仁乾ら民間文人。

六、「桼園筆話」：一八八〇（明治一三、庚辰）年五月一〇日から翌年一〇月一三日までの筆談録。一七巻一七冊。筆談者は大河内輝声と王治本（号は桼園）らが中心。

七、「韓人筆話」：一巻一冊。一八八〇（明治一三、庚辰）年八月二七日から九月六日までの筆談録。筆談者は大河内輝声、亀谷省軒、石川鴻斎、王治本らと来日した朝鮮修信使金宏集、随員李容粛、李祖淵、姜瑋ら。

八、「書画筆話」：一巻一冊。王治本による大河内輝声の詩作添削が中心。

本書の冒頭において、王宝平教授は「近代中日筆談文献之瑰宝――『大河内文書』前言」という長文を載せ、『大河内文書』という名の由来及び本書の構成、その発見者である実藤恵秀教授、『大河内文書』の主である大河内輝声、筆談の主な場所、そして『大河内文書』の特色、研究史概説、本書の出版経緯などについて詳細に紹介している。さらに、第八冊の巻末において、附録一「『大河内文書』佚存一覧表」、附録二「『大河内文書』細目」、附録三「筆談者小伝及索引」が付されており、本筆談録の利用に資する情報が満載されている。編者が前書きで指摘しているように、筆談の一部がすでに散佚したとは言え、現存する筆談の中で、資料の膨大さ、整理の丁寧さ、内容の豊富さ、参加人数の多さなどの面から見ると、『大河内文書』の右に出るものはない。本書の刊行は、東アジア文化交流の研究推進に大いに寄与するものと確信している。

本書を一覧すれば、前述の『黄遵憲与日本友人筆談遺稿』という題名には、やはり物足りない感じを持つ。実際、附録三の統計によれば、『大河内文書』に登場する中国人筆談者は公使館員と民間人を含むと五八名、朝鮮修信使は五名、日本人の参加者は全部で六八名にも及ぶ。中では石川鴻斎、岡千仞、増田貢、重野安繹、亀谷省軒、青山延寿、森春濤、依田学海、鷲津毅堂ら有名な漢学者だけでなく、大河内輝声と同じ元藩主の松平春岳、本多正訥、それに榎本武揚、勝海舟ら幕臣も入っており、交流の輪の広さを示している。政治抜きの純粋な文人交流という点では、『宮島誠一郎文書』とかな

り性質を異にするが、近代東アジアの文化交流を考察するうえで、極めて貴重な資料であることは言うまでもない。

例えば、一八七八年四月一六日、大河内は来日まもない何如璋、張斯桂、黄遵憲ら公使館員を招いて、向島での花見を楽しんだが、日本側から加藤桜老と内邨綏所が同伴し、日本料理の満喫や雅楽の演奏、漢詩の唱和など、大いに盛り上がった。「戊寅筆話」第九巻第五八話でこの日の筆談が相当の量に及び、何如璋公使が「海外看花第一遭」（本書第四冊一六一八頁）と詠んだように、この花見大会は中日文化交流史において大きな意味を持っている。後に黄遵憲が『日本雑事詩』で花見に関する詩を二首、梅若の墓に関する詩を一首残したのも、この日の体験に基づくものと考えられる。

また、一八七八年九月六日の筆談の中で、黄遵憲は石川鴻斎や大河内輝声らに、「紅楼夢乃開天闢地、従古到今第一部好小説、当与日月争光、万古不磨者。（中略）論其文章、直与左、国、史、漢並妙」（本書第五冊二一七九頁）と『紅楼夢』を絶賛し、『左伝』、『国語』、『史記』、『漢書』と肩を並べるものと高く位置づけている。『紅楼夢』を外国人に紹介した最初の事例として有名な話だが、一四〇年も前に、すでに『紅楼夢』の文学的価値を高く評価した黄遵憲の慧眼に感服するしかない。

さらに、「韓人筆話」において、大河内輝声は「僕秘蔵貴邦学士権菊軒氏与邦儒石川丈山筆話之帖、及邦儒林春斎与貴邦信使筆話之牒。僕欲歴閣下之清鑑、賜跋文之撰」（本書第八冊三六二一～三六二二頁）と述べている。権菊軒と石川丈山の筆談、及び林春斎と朝鮮修信使の筆談を秘蔵し、新修信使の金宏集に跋文を依頼したこの筆談は、やはり日韓文化交流史の貴重な記録となる。

実藤恵秀氏は『大河内文書』（平凡社東洋文庫）の扉で、「これは明治時代、日本と中国の人々が筆談をつづけた、めずらしい記録である。文を論じ、詩をつくり、民俗をたずね、風流をかたる。中国崇拝のさいごの姿であり、日中友好のさまざまな問題をふくんでいる」と述べたが、本書は近代中日のみならず、東アジア文化交流の研究にとっても、不可欠な貴重資料であることは間違いない。

評者は二〇一〇年末、天津人民出版社より『清代首届駐日公使館員筆談資料彙編』（上下）を刊行し、六種類の筆談資料を収録した。第一編「与大河内輝声等筆談」は圧倒的に量が多く、全体の五分の三を占めているにもかかわらず、翻刻できたのはわずか『大河内文書』の四分の一にすぎない。筆談プロジェクトを通じて、本書全体の翻刻完成及び関連研究の更なる前進を期待したい。

（りゅう・うちん　中国南開大学）